

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00650

研究課題名(和文) アイロニーと認識に関する認知語用論的研究

研究課題名(英文) A Cognitive-Pragmatic Approach to Irony and Cognition

研究代表者

吉村 あき子 (YOSHIMURA, Akiko)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：40252556

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アイロニーを感じる発話や事の成り行き等について、何が私たちにアイロニー性を認識させるのか(アイロニー性の認識)の解明を目標とした。日英語の多様なデータを分析した結果、アイロニー性の認識は、先行認識と現実認識の対極的認知構造を基本構想として、異なる様式(ストーリー・アイロニー、状況アイロニー、アイロニー発話)は、それぞれに、固有の追加的特性伴うシステムを構成していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アイロニー(皮肉)の言語学的研究の分析対象はアイロニー発話( )である。しかし人は、『オイディプス王』のような「ことの成り行き(ストーリー)」( )にも、火事が消防署で起こる「状況」( )にも、アイロニーを感じる。これらを包括的に説明するアイロニー研究は見当たらない。本研究は、対象が何であれ、人がアイロニーを感じる限りにおいては共通の認知構造が成立していると仮定し、アイロニーの基本的な認知構造と、 の固有特性を抽出し、各様式の特徴記述、相互の関係、を明らかにした点で、学術的意義があり、その成果が実践的コミュニケーションに応用可能である点で社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：The goal of this study was to elucidate what makes us recognize irony in utterances in our communication, events, or a series of events (i.e., irony recognition). The results of the analysis of Japanese and English data revealed that our irony recognition is fundamentally based on the cognitive structure of opposite extreme relation between antecedent recognition and reality recognition, and that the different styles ((1) story irony, (2) situational irony, and (3) ironical utterances) constitute a system with additional different characteristics unique to each of them.

研究分野：人文科学、言語学・英語学、認知語用論、関連性理論、意味論、推論、アブダクション、レトリック

キーワード：ストーリー・アイロニー 状況アイロニー アイロニー発話 皮肉 アブダクション アイロニーと発話のポイント 反対的対極関係 発話のストラテジー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

アイロニーは、伝統的に「意図された意味が、用いられた語によって表された意味と反対であるようなことばの綾 (figure of speech)」(OED)と定義されてきたが、現時点では「アイロニーの話者は、発話時点の話者以外の誰かに帰属される思考に対して乖離的態度を表現する」(Wilson 2009)という言語学的定義がそれにとって代わり広く受け入れられている。しかしこの定義は、Yoshimura (2013)のいう「帰属否定」のうち命題内容を否定の対象にする事例をもアイロニーだと誤って予測する一方、より広く一般的な視点から、ギリシア悲劇等に見られるストーリーに感じるアイロニー性を説明できない。何が人にアイロニーを認識させるのかに関する統一的説明が待たれていた。

### 2. 研究の目的

本研究は、どのような対象にせよ、アイロニー性を認識する限りにおいては、その認識に何らかの共通点があると仮定し、まず、アイロニー発話の再定義を第1目標に、その対象をストーリーに拡大して、何が私たちにアイロニー性を認識させるのか、即ちアイロニー性の認識の解明を最終目標とした。

### 3. 研究の方法

(1)アイロニーに関する先行研究を網羅的に概観し、アイロニー発話と「状況アイロニー」に関する研究の動向を把握した上で、当現象に関わるデータ収集を行った。

(2)認知処理プロセスの視点から、データをアイロニー発話・状況アイロニー・ストーリーアイロニーの3タイプに分け、アイロニー性に関するアンケートを実施したうえで、アイロニー性の高い(=アイロニー性に疑いのない)例について、認知処理プロセスの視点から、各タイプの特徴記述を行った。

(3)3タイプの共通点と相違点の観察から、共通特性と個別特性の抽出と並行して、各タイプの関係性を探った。

### 4. 研究成果

(1) **アイロニー発話は乖離的態度を非語彙的に表明するものであることを明らかにした。**「アイロニーの話者は、発話時点の話者以外の誰かに帰属される思考に対して乖離的態度を表現する」という Wilson(2009)のアイロニー発話の定義は、下記(iB)を含む多くのアイロニー発話を正しく説明するが、アイロニーではない帰属否定の(iiB)をも誤ってアイロニーだと予測する。両者の違いは、アイロニーの(iB)が、乖離的態度を非語彙的に表明しているのに対して、帰属否定の(iiB)が not という語彙を用いて明示的に乖離的態度を表明している点にあることを指摘した。

(i)A: I've finally finished my paper.

B: You've finished your paper. How often have I heard you say that?

(Wilson and Sperber 2012:129)

(ii)A: You saw a baby harbor seal at the zoo yesterday, didn't you?

B: I didn't see a baby harbor seal; I saw a baby panda. (Yoshimura 2019: 17)

(2)ストーリー・アイロニーは、**先行認識と現実認識が正反対の関係にあることに加え、先行認識の意図や願望を実現するために取った行動が、返ってそれとは裏腹の正反対の結果を引き起こしてしまったという性格を持つ「ことの成り行き」を含むことを明らかにした。**例えば、与謝野晶子氏の『源氏物語』の現代語訳の原稿が関東大震災で焼失したことを述べる下記(iii)について、(iii a)のように「大切な原稿は用心のため、勤務先の文化学院に預けていました。しかし自宅は火災を免れたのに文化学院は焼け、原稿はすべて燃えてしまいました。」と、大事な原稿を守るためわざわざ勤務先に預けるという行動をとったことが返って、その意図とは正反対の「焼失」につながった場合、このことの成り行きを読んだ 81.6%がアイロニーを感じると答えたのに対して、そのような行動をとらなかった(iii b)については、71.1%がアイロニーを感じない、と答えた。この結果は上記の特性分析を支持している。

(iii) a. 与謝野晶子にとって『源氏物語』は十代のころからの愛読書であり、現代語訳は大切なライフワークでした。1923年9月、全五十四帖のうち四十四帖まで訳し終え、あと十帖を残すところまで来たとき、関東大震災が東京を襲いました。大切な原稿は用心のため、勤務先の文化学院に預けていました。しかし自宅は火災を免れたのに文化学院は焼け、原稿はすべて燃えてしまいました。

(2019/3/15, [https://news.nifty.com/article/magazine/12171-219358/2\\_my\\_translation](https://news.nifty.com/article/magazine/12171-219358/2_my_translation))

b. 与謝野晶子にとって『源氏物語』は十代のころからの愛読書であり、現代語訳は大切なライフワークでした。1923年9月、全五十四帖のうち四十四帖まで訳し終え、

あと十帖を残すところまで来たとき、関東大震災が東京を襲いました。自宅は火災を免れましたが、原稿を置いていた勤務先の文化学院は焼け、原稿はすべて燃えてしまいました。

**(3)アイロニー発話によって伝達される推意導出には、アブダクションが貢献し、発話の字義的意味と矛盾する推意が導出されるプロセスが説明可能であることを示した。**アブダクションは、deduction(演繹)とinduction(帰納)と共に、パースが提案した3つ目の推論規則で、(iva)のように定式化され、(ivb)は具体例である。アブダクションは帰納と同様、前提の真性は帰結の真性を保証しない。しかし、日常のコミュニケーションにおいて、アブダクションが、(v)に示したような、通常の推意導出に貢献していることは、既に先の科研費研究で明らかにしたことである。

- (iv)a. 驚くべき事実 C が観察される。しかしもし A が真であれば、C は当然の事柄であろう。よって、A が真であると考えべき理由がある。
- b. 化石が発見される。それは魚の化石のようなもので、しかも陸地のずっと内側で見つかった。」(C) この現象を説明するために、「この一帯の陸地はかつては海であったに違いない」(A)と考える。A が真であれば、C は当然の事柄であろう、よって A が真であると考えべき理由がある。 (吉村 2020: 51-52, Buchler 1955: 151、米盛 2008: 54, 192)
- (v) [米西部開拓時代のシルバーレイクで、鉄道敷設工事が終わり、会社の機械類を管理するため、インガルス一家だけが厳しい冬を現地で越していた。まだ極寒の2月、西部に馬車で向かう気の早い入植者の荒くれ男達が宿を求めてきた。3人の娘がいるので断りたかったが、凍えさせるわけにいかず、引き受ける。]
- 'So Ma cooked supper for the five strange men. They filled the place with their loud boots and loud voices, and their bedding piled in heaps, ready to make their beds on the floor by the stove. Even before the supper dishes were finished, Ma took her hands from the dishwater and said quietly, "It's bedtime, girls." It was not bedtime, but they knew that she meant they were not allowed to stay downstairs among those strange men...'
- (吉村 2020: 53, Laura Ingalls Wilder 1953, *By the Shores of Silver Lake*, 225)

アイロニー発話の情報意図は推意によって伝達される。Grice の(vi)の例によって伝達されるとする X is a mean friend.は発話の字義的意味と矛盾し、implicature の性格が議論になった。

- (vi) [X, with whom A has been on close terms until now, has betrayed a secret of A's to a business rival. A and his audience both know this. A says to his audience:]  
A: X is a fine friend. (吉村 2020: 43, Grice 1989: 34)

しかし、発話の認知モデルを提案する認知語用理論の関連性理論は、ことば(発話)は、聞き手の推論を正しい軌道に乗せる働きをするものと見なす。この考え方に基づく、アブダクション発話のきっかけが不合理さであることと共に、アイロニー発話の字義通りの意味が、伝達される推意と反対である事例の存在が、自然に説明できることを明らかにした。

**(4)アイロニー発話のポイント及び犠牲者の統一的規定に成功している理論はなく、本質的に困難である可能性が高いことを明らかにした。**アイロニー発話の犠牲者について、エコー理論は「そのアイロニーが明確なターゲットや犠牲者を持つのは、その源が特定の人またはあるタイプの人の場合に限られる。さらに、アイロニー的態度は、帰属元の思考を直接のターゲットにするが、その思考を心に抱いたり、真剣にそう信じている特定の人やそういうタイプの人を間接的にターゲットにする」(Wilson 2013:46-47)と述べているが、(vii)のように当てはまらない例が散見される。

(vii) 文脈 (ハリーポッターから)[ホグワーツ魔法学校の5年生に進級したロンとハーマイオニーは監督生に指名される。ロンの双子の兄でいたずら好きのフレッドとジョージが『気絶キャンディー』を開発し、商品化を目指して、一年生に試食のアルバイトをさせ、グリフィンドール寮の談話室で次々と気絶する小さな1年生の様子を観察している。監督生のハーマイオニーは、危険だしやりすぎだと感じ、同じ監督生のロンに、一緒に止めようと提案するが、ロンは自分の兄であることもあり、知らないふりをする。ハーマイオニーは、仕方がないので、一人でやめさせようと奮闘する。抵抗する二人にてこずりながらも、彼らが最も恐れる母親に手紙を書く脅してなんとかやめさせることに成功する。この間、何もしなかった同じ監督生のロンに腹を立てて言う]

- a. ハーマイオニー:「ご支援を感謝しますわ、ロン。」 ハーマイオニーが辛辣に言った。  
b. ロン:「一人で立派にやったよ。」 ロンはもごもごといった。 (吉村 2024: 9)  
(ローリング, J.K. 著 松岡佑子訳『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』5-II, p.97, 静山社, 下線引用者)

上記(vii)のアイロニー発話の犠牲者は明らかにロンであるが、エコー理論は、帰属元思考の持ち主であるハーマイオニーが犠牲者だと分析することになる。

一方、アイロニーのプロトタイプ的分析を取る暗黙的提示理論は、「アイロニーの犠牲者は、アイロニー発話の話者の期待が実現されない原因となった行為を意図的に行った人である。」(Utsumi 2000: 1795-1796)と述べているが、(viii)のように当てはまらない例が散見される。

(viii) 文脈 (ハリー・ポッター シリーズの設定) ハリー・ポッターは魔法族である。1歳の時に、魔法界征服をもくろむ闇の魔法使いヴォルデモートに両親を殺され、母方の叔母家族(非魔法族(=マグル))に育てられる。11歳になったハリーは、ホグワーツ魔法魔術学校に入学し叔母の家を離れる。ホグワーツは、魔法使い・魔女を育てる全寮制の学校で、4つの寮(グリフィンドール・ハッフルパフ・レイブンクロー・スリザリン)が、勉強やスポーツなど様々な点で競い合い、年度末の総合得点による優勝カップ獲得を目指して熾烈な競争を繰り広げている。

(第1巻『ハリー・ポッターと賢者の石』から) ホグワーツに入学した1年生の初めての「飛行訓練」(箒に乗って飛ぶ訓練)で、グリフィンドール寮生でハリーのルームメイトのネビルが怪我をした。フーチ先生がネビルを医務室に連れて行く際、学生に「戻るまで動いてはいけない。箒もそのままにしておいておくように。さもないと、[大人気のスポーツ]クィディッチの『ク』を言う前にホグワーツから出て行ってもらうことになります」と言い残す。しかし、スリザリン寮のマルフォイが、意地悪にも怪我をしたネビルの『思い出し玉』を木のてっぺんに置こうと箒に乗って舞い上がる。ハリーはそれを止めようと箒に乗って後を追う。初めて箒に乗ったハリーだが、その素晴らしい飛行でネビルの思い出し玉を取り返す。その様子をマクゴナガル先生に見られ、ハリーは連れていかれる。退学になるかもしれない、。

ハリーは、同じ1年のマルフォイと馬が合わず、マルフォイは何かにつけ意地悪を仕掛けてくる。危うく退学になりかねない目にも合わされ、ハリーと友人ロンの思いは今や、どうやってマルフォイに仕返しするかだった。そして、そのチャンスが郵便とともにやって来た。

初の飛行練習時のネビルの事件(上記)を偶然目にして、ハリーの飛行の才能を見抜いた副校長マクゴナガル教授は、通常1年生は選手になれない規則の特例として校長の許可を得、ハリーを人気スポーツ「クィディッチ」のシーカーに抜擢し選手にする。プレイをするのに必要な箒も何も持っていないハリーに、マクゴナガル先生から内緒で、高性能の箒「ニンバス2000」が送られてきたのだ。その事情を全く知らないマルフォイがそれを見つけて言う]

マルフォイ:「今度こそおしまいだな、ポッター。一年生は箒を持つちゃいけないんだ。」

ロン:「ただの箒なんかじゃないぞ。なんたって、ニンバス2000だけ。君、家になに持ってるって言った? コメット260かい? コメットって見かけは派手だけど、ニンバスとは格が違うんだよ。」

マルフォイ:「君になにがわかる、ウィーズリー。柄の半分も買えないくせに。兄貴たちと一緒に小枝を一本ずつためなきゃならないくせに。」

フリットウィック先生:「君たち、言い争いじゃないだろうね?」

マルフォイ:「先生、ポッターのところに箒が送られてきたんですよ。」

フリットウィック先生:「いやあ、いやあ、そうらしいね。マクゴナガル先生が特別措置について話してくれたよ。ところでポッター、箒は何型か?」

a. ハリー:「ニンバス2000です。実は、買っていたのはマルフォイのおかげなんです。」

マルフォイは怒りと当惑をむき出しにした顔をした。二人は笑いを押し殺しながら階段を上がった。大理石の階段を上りきったところで、ハリーは思い存分笑った。(吉村 2024: 7-8)

(ローリング, J.K. 著 松岡佑子訳『ハリー・ポッターと賢者の石』1-II, pp.8-9, 静山社, 下線引用者)

上記(viia)のアイロニー発話の犠牲者は明らかにマルフォイであるが、発話者ハリーの期待は実現されているので、暗黙的提示理論は、そもそも暗黙的に提示するアイロニー環境が成立しておらず、犠牲者はいないと分析することになる。このような観察の結果は、アイロニー発話の犠牲者の統一的規定の困難さを示唆している。

#### (5) ストーリー・アイロニーからアイロニー発話を分析するという分析方向の可能性

以上の考察から導き出されることは、以下のようにまとめられる。

アイロニー発話の様々な理論が的確に説明できる一群の事例が確かに存在する一方、全ての事例を統一的規定に成功した理論は未だ存在しない。

発話は意図明示的刺激であり、話者は、それぞれの文脈における情報意図を持って発話している。その情報意図(発話のポイント)が、統一的に、「乖離的態度の表明」や「既存のアイロニー環境の暗黙的提示」とするのは、過度の一般化の可能性はある。

そもそも、アイロニー発話の分析理論は、ストーリー・アイロニーを分析することができない。

発想を転換して、ストーリー・アイロニーを基本形として、アイロニー発話を分析する方向性を検討する価値がある。

#### (6) アイロニー発話は、ストーリー・アイロニーのアイロニー特性をストラテジーとして利用する発話であるという仮説を提案した。

例えば、上記(viia)の発話のポイントはハーマイオニーのロンに対する怒りの「感情表出」であり、(viia)の発話のポイントは、ハリーのマルフォイへの「仕返し?」であり、下記(ixa)のポイントは、喜多見の質問に答えること(「情報提供」)である。これらは、アイロニー発話のポイントは、文脈によって多様であることを示している。そのポイ

ント(情報意図)を伝達するために、ストーリー・アイロニーの特性を、ストラテジーとして用いるのがアイロニー発話であるという仮説を提案した。

(ix) [ < 『日曜劇場 TOKYO MER 走る救命救急室』の背景 > 赤塚(あかつか)都知事は、人命最優先の政治を実施するため、オペ室を備えた緊急車両で事故や事件の現場に向かい人命救助に当たる東京 MER (Mobile Emergency Room) を立ち上げ試験運用を始めた。MER は、赤塚が抜擢した喜多見(きたみ)医師を含む医師3名、麻酔科医1名、看護師2名、医療工学技士1名の7名からなる。MER の正式運用には厚生労働大臣(白金(しろがね)真理子)の認可が必要だが、白金大臣と赤塚都知事は、日本初の女性総理の椅子を争うライバル関係にあり、白金は赤塚を追い落とすため東京 MER を解体に追い込もうと画策する。。。次の発話の直接的な文脈は、赤塚都知事が、定時会見を控え知事室でヘアメイクをされながら、MER の喜多見チーフと話している]

赤塚知事：「医療っていうものは政治と深く関わっているの。東京 MER も例外じゃない。わかりやすく言うとね、国と東京は仲が悪い。国は、私が立ち上げた MER に失敗の烙印を押して潰したがつている。一番やっかいなのが厚生労働大臣の白金真理子。聞いたことあるでしょ？ 赤塚と白金の赤白戦争。どっちが日本で最初の女性総理になるのかって、マスコミは勝手にたきつけてる。男だとか女だとかって古臭い話よね」

喜多見：「実際にはどうなんですか？ 白金大臣との関係」

喜多見が尋ねると、ヘアメイクを終えた赤塚は頬杖をつき、顔をしかめながら

a. 赤塚：「むちゃくちゃ仲良いわよ」と言った。

赤塚：「白金は必ず MER を潰しにくるわ。厚労省から派遣されている医系技官の音羽って人は間違いなく白金の息が掛かっている敵よ。くれぐれも弱みは見せないようにね」

(吉村 2024: 10) (黒岩勉脚本 百瀬しのぶノベライズ (2023) 『日曜劇場 TOKYO MER 走る救命救急室』 I, pp.44-45, 下線引用者)

以上。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉村あき子	4. 巻 第39号
2. 論文標題 「発話に基づくアイロニー分析の限界」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 人間文化総合科学研究科年報	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村あき子	4. 巻 第11号
2. 論文標題 「感じる皮肉と伝える皮肉—そして英語のアイロニーと日本語の皮肉—」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『欧米言語文化研究』	6. 最初と最後の頁 63-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村あき子	4. 巻 第10号
2. 論文標題 「アイロニー発話のターゲットと乖離的態度—ハリーポッター（第1&第2巻）のアイロニー—」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『欧米言語文化研究』	6. 最初と最後の頁 57-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村あき子	4. 巻 第9号
2. 論文標題 「皮肉発話と感情表出」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『欧米言語文化研究』	6. 最初と最後の頁 91-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村あき子	4. 巻 8
2. 論文標題 「アイロニー発話とアブダクション」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『欧米言語文化研究』	6. 最初と最後の頁 43-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 YOSHIMURA Akiko	4. 巻 7
2. 論文標題 "Another Property of Irony: Findings from Observing Story Ironies"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in European and American Language and Culture	6. 最初と最後の頁 15-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村あき子	4. 巻 1
2. 論文標題 「Have you seen him yet?は なぜ「彼にもう会いましたか?」なのか」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『英語学を英語授業に活かす 市河賞の精神(こころ)を受け継いで』(開拓社)	6. 最初と最後の頁 285-304
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 1件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 吉村あき子
2. 発表標題 「皮肉ー発話とストーリーー」
3. 学会等名 第40回奈良女子大学英語学・言語学研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉村あき子
2. 発表標題 「アイロニー発話と推論的コミュニケーション」
3. 学会等名 日本認知科学会 第38回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉村あき子
2. 発表標題 「皮肉発話と推意」
3. 学会等名 奈良女子大学文学部研究交流集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉村あき子
2. 発表標題 「アイロニーと推論」
3. 学会等名 第34回奈良女子大学 英語学・言語学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 YOSHIMURA Akiko
2. 発表標題 "Another Property of Irony: Findings from Observing Story Ironies"
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (Hong Kong) (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 YOSHIMURA, Akiko
2. 発表標題 "On Story Irony"
3. 学会等名 The 29th Nara Women's University Linguistics Seminar (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Laurence Horn(著), 河上誓作, 濱本秀樹, 吉村あき子, 加藤泰彦(訳)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 822
3. 書名 『否定の博物誌』	

1. 著者名 早瀬尚子, 吉村あき子, 谷口一美, 小松原哲太, 井上逸平, 多々良直弘	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 330
3. 書名 『言語の認知とコミュニケーション - 意味論・語用論, 認知言語学, 社会言語学 - 』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------